
お好み焼き

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お好み焼き

【Nコード】

N8418F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

大阪のお好み焼き屋の娘桜と広島のお好み焼き屋の娘菜月。どちらも自分のお好み焼きこそが最高だと言って引かない。それで先生の提案で勝負となるが。お好み焼きはどちらも美味しいです。

第一章

お好み焼き

今年四組では非常に厄介な問題が起こっていた。簡単に言えば内戦が起こっていたのだ。しかもそれは非常に深刻なものであった。「あんな味音痴や」

「その台詞そっくりそのままあんに返したるけえ」
クラスの中で大阪弁と広島弁で喧嘩が行われている。かなり柄が悪く聞こえる。

見ればクラスの中央で二人の女の子が言い争っている。一人は黒いやけに長いポニーテールでアーモンド型の釣り目が特徴である。唇が結構小さく尖った感じだ。スカートはかなり短くしていてそれが見事な脚を露わにさせている。

対するのは黒髪のツインテールの女の子だ。幼く可愛らしい顔立ちだがどういうわけか制服のスカートを目の前にいるポニーテールに対抗するように短くしている。こちらはかなり見事な脚だ。

「うちはな。通やで」

「うちもじゃ」

大阪弁はこの二人からのものだった。それぞれ口を尖らせて言い合っている。ポニーテールが大阪弁でツインテールが広島弁だった。「うちの家は代々お好み焼き屋なんや」

「それはうちもじゃけえな」

「だから言っんや」

「こっちもじゃ」

顔をすり合わさんばかりに近寄せ合う。そのうえでさらに言い合うのである。

「お好み焼きいうたら大阪や」

「広島じゃ」

何かと思えばお好み焼きの話である。とにかくどちらも引かない。

そのまま言い合い今にも取っ組み合いになりかねない有様だ。皆そんな二人を見て呆れ果て止めようとするがそれが二人の剣幕の才一ラにより中々できないでいた。

「お好み焼きのあの厚さには誰も勝てんで」

「広島だな。あのキャベツの使い方じゃ」

「こう言い合いやはり互いに引かない。」

「それがわからん奴はアホや」

「あかんたれじゃけえな」

「言つたな」

「そつちこそ」

ここで雰囲気さらに険悪なものになるまさに一触即発であった。

「ほな。一回ケリつけるか？」

「望むところじゃけえ」

本当に取っ組み合いになりそうなので今度こそ皆が止めようとする。しかしそれよりも前にそれを止める人がやって来たのであった。

「こら、御前等」

「あつ、ゴリラブタ」

「そついや次の授業ゴリラブタの物理だったつけ」

「誰がゴリラブタだ」

やたらと大きく太っていてしかもいかつい顔で尚且つ五分刈りという到底学校の先生には思えないのが教室にいた。その大きさは上も横も普通の生徒の倍はあった。

その先生が二人の間に来る。そしてそれぞれの名を呼ぶのだった。

「赤坂桜」

「ゴリラブタかいな」

ポニーテールが応える。

「青柳菜月」

「余計な仲裁は無用じゃけえ」

今度はツインテールだった。

「まずは言っておく」

ゴリラブタと呼ばれたその先生は闘争心をそのままにさせている二人に対して告げる。

「もう授業がはじまるぞ」

「何や、もうそんな時間かいな」

「相変わらず時間ちゆうのは進むのが早いのう」

そう言われても動じるところのない二人であった。反省している様子は当然ない。

「ほな。ちゃっちゃと席に着こうかいな」

「その前に言っておく」

「何や？」

「何じゃ？」

桜も菜月も先生の言葉に顔を向ける。そのタイミングは同時だった。

「御前等、今日の昼休み職員室に來い」

「ああ、お好み焼き御馳走して欲しいんやな」

「そうじゃったら遠慮したらいけんで」

「御前等、わかつてるのか!？」

二人があまりにも反省している様子がないので呆れる先生だった。

「全く。職員室といったらな」

「何かあるんかいな」

「うち知らんで」

「説教に決まっているだろうが。全く御前等ときたら」

その赤ら顔をさらに赤くさせての言葉だった。

「いつもいつも。何でこう仲が悪いんだ」

「こいつがお好み焼きは広島が正統言うからや」

「大阪のやつじゃなきゃいけんて言うけえの」

「そんなん絶対許せんや」

「あんなんいつもあくか」

とにかくそれぞれ引くことを知らない二人であった。

「何が広島やねん。変な焼き方覚えてからに」

「あれの何処がお好み焼きなんじゃ」
また言い合ふのだった。

「お好み焼きはな。とにかく大阪のやつこそがほんまもんで」
「広島はお好み焼きの発祥じゃけえ。こっちが正しいじゃ」⁶
「ああ、もういい加減にしろ」

遂に先生も完全に切れてしまった。

「もう職員室に来なくてもいいぞ」

「そうでつか」

「それやったら行かんけえ」

「久々に切れた」

見れば本当に顔を真っ赤にさせている。どう見てもその仇名のゴリラブタである。名付けた人間はよく見ていると言うべきであろうか。

「こうなったら御前等で決着をつける」

「ケリつける？」

「腕っぷしけえ」

菜月はこれまたやけに物騒なことを言い出してきた。

「それやったら毎日正統なお好み焼きで鍛え上げて栄養もつけてる
うちの思っ壺じゃ」

「何言うとるんや、アホか」

桜も負けていない。というよりは嫌になるばで互角であった。

「うちは赤ん坊の頃からへらを持ってたんや」

こう言うのである。

「それで来る日も来る日もお好み焼きを焼いとるんや」

「うちもじゃ」

「うちはちゃうで。何時間も焼いてな」

本当に見事なまでのお好み焼き馬鹿である。しかもこれが桜だけではなく菜月までそうだというのだから実に始末の悪い話であった。
「それで何でも入れられて栄養たっぷりのお好み焼き食べてな。最強になったんや」

「最強はうちじゃ」

話が完全に堂々巡りの水掛け論になってきていた。

「うちの広島こそが最強なんじゃけえ。嘘つくなや」

「大阪は無敵や」

桜は今度は無敵だと言い出した。

「無敵の大阪。味合わせたるで」

「やるか？」

「やらいでか？」

「だからだ。お好み焼きで勝負をつけろ」

いい加減うんざりとした調子での先生の怒りの言葉だった。

「わかったな。お好み焼きでだ」

「あつ、それでっか」

「それで勝負つけりやええんじゃな」

「そうだ。当たり前だろうが」

怒りを十二分に含んだ言葉であつた。

「お好み焼きでいつも喧嘩しているんならそれで決着をつけろ」

「そうだよな」

「ああ、全くだ」

それまで二人のあまりもの破天荒さの前に見ていることしかできないでいたクラスの皆は先生のその言葉に完全に同意して頷くのだつた。

「お好み焼きで言い合ってるんだからやっぱりな」

「それだよな。決着を着けるんならな」

「そうだよな」

「わかったな」

先生はあらためて二人に対して問うた。

「それでな。いいな」

「うちが絶対に勝つしな」

「うちが負けるけえ」

二人はこう言われても相変わらずの調子だったがそれでもだった。

第二章

「ええで」

「受けて立つ」

毅然としたそれぞれの言葉だった。

「それで大阪の素晴らしさを味合わせたるわ」

「広島は負けんけえの」

「それを気が済むまでやれ」

先生はまた二人に対して言った。

「それでわかつたな」

「わかりました。そやったら」

「やる時は」

「ああ、それだな」

実はまだそこまでは考えていなかった先生だった。話を振られてあらためて考える顔になり暫く時間を置いてから二人に答えるのだった。

「そうだな。それで御前等」

「はい」

二人は同時に先生に答えてきた。

「何時でもいいんだな」

「うちの腕は何時でも万全でっせ」

「伊達に毎日やってるわけじゃないんじゃけえの」

「こうそれぞれ返事を返してきた。」

「そやから何やったら今すぐにでも」

「やったるけえな」

「そこまで言うのならだ。まず道具を揃えて」

「家から持って来ますで」

「うちもじゃ」

二人はこれについてはすぐに答えてきた。

「もうそれやったら屋台でもあるさかい」

「こつちも屋台も」

「随分用意がいいな」

先生もこの手際のよさには感心はする。

「それに食材かて」

「どれだけでもあるんじゃんけえの」

これもであつた。

「すぐにでもできますで」

「もう今にでも。家帰つて」

「まあ待て」

流石にそれは止める先生だつた。

「今はいい」

「ええんでつか」

「じゃあ何時なんですか？」

「今度の日曜だ」

時間は先生が指定するのだつた。これは教師の権限でいささか強権的だつたがそうでもしないとこの二人は従わないのがわかつていたからだ。

「今度の日曜。いいな」

「ええ。何時でも」

「二言はありませんけえの」

二人もそれで異存はないようであつた。先生はそれを確かめてからまた言う。

「その間に宣伝をしとくか」

「宣伝!？」

「そうだ。今のところ知つてるのはこのクラスだけだな」

声をあげたクラスの面々に対して答えた言葉だつた。

「だからだ。他のクラスや学年にも勝負のことを知らせてだな」

「全校を巻き込むんですか」

「無差別テロみたいですね」

「その通りだ……ってこら」

生徒達の言葉に頷きかけたところで止まる先生だった。

「人聞きの悪いことを言うな。俺は北朝鮮の工作員か」

「違うんですか？だつて」

「この連中の騒動に巻き込むつてやっぱり」

「この騒動を終わらせる為だ」⁸

先生の主張ではこうであつた。

「その為にだ。皆に確かめてもらうんだよ」

「皆にですか」

「そうだ。全校でこの二人のお好み焼きを食べてもらつ」

先生が言うのはそういうことだった。

「それでな。どっちが美味いかアンケートを取つてな」

「それで白黒つけるつてわけですか」

「どうだ？」

ここまで話したうえで皆に尋ねた。

「いい考えだろ。これなら話がすぐに終わるぞ」

「何か今日の先生冴えてるよな」

「確変つてやつか？」

生徒達は先生の考えを聞いてもこれまでと態度を変えずにこつ言
うのであつた。

「いつもはマジでゴリラブタなのによ」

「こりゃ明日台風と地震がいつぺんに来るな」

「……あのな、御前等」

言われっぱなしの先生も流石に腹に据えかねて彼等に言ってきた。

「俺を何だと思つてるんだ？」

「ですから先生だつて」

「そう思つてるんですけれど？」

「嘘つけ、嘘を」

少なくとも普段からボロクソに言ってくれていることはわかる先生
だった。そうでなくてはここまで言う筈がないからである。これ

だけはわかった。

「まあいい。それでだ」

「ええ」

「これでいいな？」

あらためて彼等に問うのであった。

第三章

「食ってそのうえでだ」

「どっちが上か確かめてもらうんですね」

「そういうことだ。ただし金は払えよ」

「えっ、審査するのに金かかるんですか？」

「それって何か」

「心配あらへんで」

「そこんところは勉強しておくけんのお」

桜と菜月がここで嫌な顔をするクラスメイト達に対して言っのであった。

「一枚五百円のところを四百円」

「それでどうじゃ」

「まあその位ならいいか」

「そうだな」

皆その値段なら、と納得するのだった。やはり普段よりも安いというのも売りになっていた。皆こつしたところはしっかりとしていた。

「じゃあ俺達はそれでな」

「楽しく食べさせてもらうぜ」

「わかったら学校中に宣伝するからな」

先生がまた皆に対して言う。

「それでいいな」

「ええ。先生が奢ってくれるんなら最高だったんですね」

「それはないですか」

「俺を破産させる気か」

むっとした顔になって言い返す先生だった。また随分とノリがいいようである。

「御前等全員にそんなことできるか。自分の金で好きなだけ食え」

「まあそういうことで」

「今度の日曜だな」

「負けへんで」

「それはこつちの台詞じゃ」

皆が早速お好み焼きを楽しみにしているところで桜と菜月はまた睨み合うのであった。

「大阪の味に勝てるのはあらへんからな」

「広島は至高じゃ。思い知らせたるけえのお」

こつ言い合いそれぞれ勝利を誓い睨み合うのだった。そして時間は瞬く間に過ぎその日曜日になった。学校の中庭に並んで二軒の屋台が並んでいる。それぞれ桜と菜月が中にいて鉄板の上に油をひきそこで早速両手に持つていているヘラを使つてお好み焼きを焼いていた。まず桜のそれは大阪風だった。分厚く焼かれておりその中にキャベツや豚肉や具が入っている。やはり彼女はそれであつた。

対する菜月のそれは当然ながら広島風である。二枚の薄い生地の間にはキャベツやモヤシや具が入っている。こちらもちろん言えば当然であつた。

「さあ、いよいよだな」

「そうだな」

皆その一枚ずつ的確に、だが手早く焼かれていくそのお好み焼きを見つつ屋台の前に集まっていた。もうソースや青海苔、鰹節の匂いが辺りに満ちている。当然マヨネーズもある。

「どつちが美味そうだ？」

「俺は大阪かな」

「私は広島ね」

二人の屋台を覗きながら皆それぞれ言う。

「やっぱりな。どつちかっていうと」

「そちらかしら」

「けれどどつちにしろな」

「ああ。食べたいよな」

「もうすぐよね」

やはりまずはそれだった。そのソースの暴力的な香りの前に皆暴動寸前だった。とにかく今まさに戦いがはじまろうとしているのであった。

「さてと、いよいよか」

そのゴリラブタと呼ばれている先生が屋台の前に皆が集まっているのを見て楽しそうに言う。

「そろそろはじまるな。じゃあ俺も」

「おや、袴田先生」

ここで温厚な顔の老人に声をかけられるのだった。

「貴方も参加されるのですね」

「あつ、校長」

その老人はこの学校の校長先生だった。生徒からも教師からもその温厚な人柄で評判の人物である。当然PTAからも人気が高い。所謂いい先生である。

「先生も」

「ええ、まあ」

ちらりと屋台の方を見つつ校長先生に答える先生だった。

「言いだしつぺですしね、私が」

「いい案だと思いますよ」

校長先生はその温厚な笑みで先生に対して述べた。

「やはり。食べ物言い争いはその食べ物で解決するのは一番ですから」

「だからですか」

「はい。それにです」

見れば校長先生にしろその視線はじつと二つの屋台の方に向けられている。そこから離れるところがないのがみそであった。

「私も。楽しみにしています」

「校長もですか」

「実は。お好み焼きが大好きです」

温和でかつにこやかな笑みを浮かべて述べる校長先生であった。

「私もまた」

「左様ですか。ではどちらを？」

「それは断定できません」

今度はそれぞれの屋台を見ての言葉であった。

「それに関しましては。実際に食べてみないと」

「そういうことですか。それでは」

「はい」 8

早速一歩前に出る校長先生であった。

「少し。確かめてきます」

「そうですね。では私も」

この先生もまた校長先生に続いて屋台に向かう。屋台の前に来るともう行列になっていた。そこに並ぼうとすると早速生徒達が彼を見て言うのであった。

「げっ、ゴリラブタじゃねえか」

「何しに来たんだよ」

「まさか食いに来たのかよ」

「また太るぜ、あいつ」

「聞こえてるぞ、こら」

いつもの如く無茶苦茶言われたので言葉を怒らせる先生であった。

「俺が太ろうがどうなるうが勝手だろうが。違うか？」

「けれど先生って糖尿ですよね」

「あれ、痛風じゃなかったか？」

「俺高血圧って聞いたぜ」

どれにしる聞きたくもない不吉な名前の病気ばかりであった。確かに大人になればこういった病気のことが気になったりするものだし、しかし彼等の言葉はこれまた実に無遠慮でありしかも先生の神経を逆撫でするのに充分過ぎる程のものであったのであった。

そして先生はそれを聞いて。やはりいつものように言うのであった。最早この学校ではお約束ともなっている話の流れであった。

「どれにもなつとらんわ」

「あれっ、そうなんですか」

「成人病じゃないんですか」

「そこには気をつけているわ」

これは本当のことである。太っているから余計にであった。

「かみさんに言われてな。ちゃんとしているぞ」

「げっ、先生結婚していたんですか!？」

「嘘でしょ、それ」

「嘘言つと閻魔様に舌を抜かれますよ」

「・・・・・・あのなあ」

生徒達のあまりにも酷い言葉に流石に閉口しつつも言つのであった。

第四章

「俺だつて結婚位してるわ」

「そうなんですか」

「そうだ。とにかくだ」

先生は言つのだつた。

「俺もお好み焼きを食うからな」

「あいよ、また一枚予約やな」

「了解じゃけえ」

遠くからそれぞれ桜と菜月の言葉が返ってきた。行列の向こうを見てみると二人はそれぞれ凄まじい勢いでお好み焼きを焼きそこにソースやマヨネーズや海苔やかつおぶしを電光石火でかけていた。それは最早神の領域に達している見事な動きであつた。

先生はその二人を見て。ぽつりと呟くのだつた。

「もう少し時間がかかりそうだな」

「いえ、すぐですよ」

「そうですね、すぐなんですよこれが」

「すぐなのか」

言われてみればそうだつた。列の動きを見てみるとかなり速い。

少なくとも先生が最初に思っていたよりも三倍は速いものであつた。

「確かにそうかもな」

「あの二人手が早いからすぐなんですよ」

「そうそう。それで先生」

生徒達はまた先生に尋ねてきた。

「どっちにするんですか？」

「大阪ですか？広島ですか？」

「両方食つてみる」

それが先生の考えであつた。

「そうじゃないと両方の味がわからないからな」

「実は俺達もそうなんですよ」

「ですからお金は倍かかってますけれどね」

「やっぱりそうか」

「まあそれでもこの匂いを前にすれば」

「そうそう」

ソースのその香りをかいでそれだけで恍惚として倒れそうになる生徒達であった。ソースのその暴力的な香りの前にノックアウトされようとしているのだ。

「それだけ出しても」

「惜しくはないですよ」

「そうだな。確かにな」

「その通りですね。では袴田先生」

「あつ、はい」

ここでそれまで前にいた校長先生の言葉に応える。校長先生も先生もちゃんと並んで待っていたのだ。この辺りのことはちゃんとわかまえていたのであった。

「そろそろですよ」

「そうですね。速いですね」

「早い安い旨い」

こういった店での決まりの売り言葉であった。

「実にいいことはありませんか」

「確かに」

先生も納得する正論であった。まさにその通りである。だからこそ牛丼が人気の食べ物でありそれができる店は人気になる。まさにその通りであった。

「それでは。私も両方を」

「校長もですか」

「恥ずかしながらこの歳でも底なしでして」

おおらかに笑いながらの言葉であった。

「それでは。頂きます」

「そうですね。では私も」

「あいよ、校長先生」

「ゴリラブタ、できたけえのう」

「ここまで来てゴリラブタとか言うなっ」

客として来たのにそう言われてまたしても怒る先生だった。

「大体俺は袴田だ。ゴリラブタじゃないぞ」

「それはええから早く列から出るんじゃ」

「そやそや。皆列になつてゐるからな。はよ出るんや」

桜にまで言われて忌々しさを感じながらもそれでも外に出る。そうして学校の中庭のベンチに座つてその好み焼きを食べはじめ。横には校長先生がいて見事に大小になっていた。

「それではいよいよですね」

「はい」

既に箸を手につけている。後は食べるだけであつた。

実際に紙の皿の上に置かれたそれを小さく切つて箸に取つて口の中に入れる。まずソースにマヨネーズ、青海苔にかつおぶしの香りが口の中を支配する。そして次にお好み焼き自体の味が。先生が最初に食べたのは桜の大阪の方であつた。その味はというと。

「おや」

「ほほう」

先生だけでなく校長先生も声をあげたのであつた。楽しむ声であつた。

「これはまた」

「美味しいですね」

「はい。確かに」

校長先生は満面の笑顔で先生に述べるのだった。

「流石に。言うだけありますね」

「こちらもです」

先生もまた言う。なお先生はまずは桜の大阪風を食べ校長先生は菜月の広島風だ。だがそれでもそれぞれ美味しいと言つたのである。

「これだけのお好み焼きとは」

「思いませんでしたね」

「これは赤坂の勝ちでしょうか」

先生はまず桜の方が勝ったと思った。彼女のお好み焼きを食べたうえで。

「これ程までとは」

「いえいえ、私はですね」

しかし校長先生は校長先生でまた違うことを言うのであった。

「青柳さんだと思いますよ」

「広島がですか」

「このお好み焼きは最高です」

それが校長先生の主張の根拠であった。

「ですから。これは」

「いや、待って下さい」

だがここで先生は言うのであった。

「赤坂のこの大阪風もですね」

「よいのですか」

「是非食べてみて下さい」

校長先生もその膝の上に桜の大阪風お好み焼きを置いている。だからこそ勧めるのであった。

「そうすればわかりますから」

「では袴田先生もですね」

「私ですか」

「そう。先生ですよ」

校長先生はその温和な顔で先生に話した。

「青柳さんの広島風を召し上がられてはどうでしょうか」

「青柳のをですか」

「さあ、どうぞ」

先生の膝の上にもまた菜月の広島風お好み焼きがある。校長先生と全く同じ状況だ。先程二人で同時に買ったものだ。だからこそ校

長先生もまた言うのであった。

「その好み焼きを。是非」

「わかりました」

そして先生は校長先生のその言葉に頷くのであった。

「それでは。是非」

「まずは召し上がられてですね」

校長先生はまた述べた。

第五章

「それからですね。最終的な判断は」

「そうですね。ではこちらも」

「はい。食べましょう」

こうして校長先生も先生ももう一方のお好み焼きもまた食べるのであった。そしてその結果出す判定とは。これしかないのであった。

「これはまた」

「そうですね」

二人で言い合う。それぞれのお好み焼きを口の中に入れたまま。

「どちらがどちらとは」

「言えませんか」

「はい」

これが二人の先生の結論であった。

「これはまたあまりにもレベルが高いので」

「確かに」

先生は校長先生の今の言葉に頷いた。

「どちらがどちらとは」

「言えませんか」

「さて。私達はそうですが」

ここであらためて言う校長先生であった。

「生徒達はとうでしょうか」

「それは人それぞれですが」

こう言って即答は避ける先生だった。

「ですが」

「ですが？」

「舌は正直です」

これがこの先生の考えであった。

「決して嘘はつきません」

「そうですね。人間言葉では嘘はつけても」

「舌で嘘はつけません」

校長先生に対して述べた。

「それは決して」

「それでは。中々面白い結果が出そうですね」

「ええ。さて」

ここでどちらのお好み焼きも奇麗に食べ終える先生だった。見れば校長先生もどちらも美味しそうに食べ続けている。

そしてまた先生に対して言うのであった。

「最近。食が細くなったのですが」

「そうだったのですか」

「歳でしてね」

一瞬だが苦笑いも浮かべる校長先生だった。

「どうしても捕捉なっていました」

「そうでしたか」

「ですが。今は」

次にそれまでの言葉を打ち消してみせた。そのうえでまた言葉を続ける。

「このままだとどちらも食べられますね」

「どちらもですか」

「そうです。どちらもです」

体格に恵まれている先生はともかくとして細く小柄な校長先生の食べる勢いもまたいいものだった。それを見ていると校長先生もまたどちらのお好み焼きもまた気に入っているのがわかる。

そして瞬く間に。校長先生もまたお好み焼きを二枚共食べ終えるのであった。そのうえで満足しきった声でこう述べるのであった。

「御馳走様です」

「食べ終えられましたね」

「これが私の答えです」

「それがですか」

「はい、そうです」

また満ち足りた声で答える校長先生であった。

「さて。後は」

「判定ですか」

「本当にどうなるか楽しみです」

また言う校長先生であった。

「どういった判定になるのか」

「そうですね。それでは」

「はい。私達もまた」

こうして先生達も判定を下すのであった。程無くどちらのお好み焼きも売り切れ判定となった。その結果はというと。

「何やて!？」

「こうなるんけ」

驚いているのは桜と葉月だけだった。二人はそれぞれの屋台から驚いた声で叫ぶ。だがそうなっているのはその二人だけであった。

「同じって何やねん」

「うちの方が上ちゃうんか」

「だってなあ」

「実際なあ」

しかし皆はその二人に対して言うのであった。実際に食べた面々の言葉である。

「味は互角だったぜ」

「完全にな」

「互角!？」

「何でじゃ」

二人だけが信じない。お互い顔を見合わせるがそれでもだった。

「大阪の方が上の筈や」

「広島ダントツじゃけえ。嘘じゃなく」

「いや、互角だったぞ」

「その通りですよ」

「げっ、ゴリラブタに」

「校長先生まで」

先生はともかく校長先生まで出て来たのは二人にとっては驚きだった。流石にまたゴリラブタと呼ばれた先生は不満そうであったが、「食ってみてわかったんだ」

先生はゴリラブタと呼ばれて不機嫌になった顔で述べた。

「御前等の腕もいいしお好み焼きの味も互角だった」

「うち等の腕の問題やないんか」

「そうじゃったらやっぱり広島が」

「いえ、袴田先生の仰る通りです」

「袴田先生って？」

「だからゴリラブタのことじゃねえのか？」

実は先生の名前は殆どの人間が見事に忘れてしまっていた。その仇名ばかりが有名になってしまっているのであった。先生にとっては災難なことに。

「それってよ」

「ああ、そっぴやそうか」

「そういう名前だったな、そっぴえば」

「全く。俺の名前のことはまあい」

本当はよくないはないのだがとりあえずそれは置いておく先生だった。

「とにかくだ。大阪も広島もなかった」

「ないんか！？」

「そんな訳は」

「だから聞け」

全く納得しようとしないうと桜と菜月に対してまた言う先生だった。

第六章

「確かに美味かった」

「それは確かに」

「マジで美味かったな」

皆もそれは認める。先生の言う通りだった。

「どちらもな。しかしだ」

先生はさらに言うのだった。

「どちらがよりよいとは優劣はつけられなかった」

「だからそれは嘘や、大阪こそが」

「広島は好み焼き発祥じゃけえ。それで何で」

「だからだ。御前等の腕は互角だった」

先生が言うのはそこだった。

「完全にな。互角の腕で作ればどんな料理でもそのレベルは同じになるんだ」

「どんな料理でも」

「互角に」

「そうだ」

先生の声が一段と強いものになった。

「そういうことだ。だから大阪風も広島風も同じ美味さになったんだ」

「腕やったんか」

「それが好み焼きを」

「そういうことだ。わかったな」

あらためて二人に対して告げた。

「そちらがいいというんじゃないんだ。同じなんだ」

「好み焼きはどっちでも」

「同じなんじゃな」

「そうだ。わかったな」

先生の言葉がここでまた強くなった。

「どちらがいいというものじゃないんだ。大切なのは腕だ」

「そうか、わかったで」

「腕じゃったら」

先生の言葉を聞いて同時に顔を上げる二人だった。そうして見合っただうえで。

「菜月」

「桜」

まず互いの名を呼び合うのだった。雰囲気明らかに違ってきていた。何と実にいいタイミングで二人の後ろには鮮やかなまでに赤い大きな夕陽が出て来ていた。

「おっ、このシチュエーションは」

「まさか」

皆その夕陽を見て笑顔になる。いい雰囲気だと思ったのだ。

それは先生も同じだった。ずっと横にいる校長先生に対して話した。

「これで一件落着ですな」

二人を見ながら会心の笑みでの言葉であった。

「これで」

「そうですね」

そしてそれは校長先生も同じであった。誰もがこれで終わりだと思っただ。

「これで。この騒ぎも」

「はい。後は」

感動の和解だと。誰もが思った。当然皆も先生達もだ。ところがそれで無事終わるかという。そうは問屋が卸さないのであった。

二人は顔を見合わせあつて。手を差し出すかわりにそれぞれお好み焼きのヘラを持ち出してお互いに言い合っただであった。

「こうなつたらな！」

「腕じゃ！」

相変わらず激しい敵意を見せながら叫び合う。制服のミニスカートの上に付けているエプロンはどちらもソースで汚れきっているがそれにも構わずだ。

「腕磨いて抜かしたるからな！」

「それはこつちの台詞じゃ！」

今度は腕であつた。

「腕は幾らでも磨ける。うちは天才やで」

「面白いこと言うのう。天才はうちじゃ」

またしても睨み合っていた。

「この天才に勝てる筈がないやろ！」

「天才はうちじゃ！」

「おどれには絶対勝つたる！」

「われ泣かしたるけえのお！」

「駄目だこりゃ」

そんな二人を見た生徒達の言葉であつた。

「こいつ等はもうどうしようもねえな」

「どうあつても喧嘩かよ」

「殆どあれだな。軍鶏」

また随分と上げつない例えであつた。

「それか闘犬じゃねえか。もうどうしようもねえよ」

「そうだな。もうこれはな」

「お手上げだよ」

こつ言つて呆れ返る皆であつた。そして先生はというと。もうその目を点にさせて肩の力が思いきり抜けて呆然としていたのであつた。

第七章

「何でだ？」

次にこうも言った。

「何でこうなるんだ？折角終わると思ったのに」

「ははは、まあそうなってもいいではありませんか」

「校長」

しかし校長先生は明るく笑いながら先生に対して述べるのだった。

「これもまた」

「いいのですか？」

「切磋琢磨です」

儒学の言葉だ。互いに磨き合うということだ。若い頃はそうせよと重ね重ね言うのはかなり年輩の教育者である。この校長はそこまでするではないがそれでも言うのだった。

「ですからこれもまたよしです」

「いいのですか」

「暴力はないではないですか」

「それは確かに」

その通りだった。二人はいがみ合いや競争をしてもそれでもそういった喧嘩はしないのだった。あくまで互いにライバル意識を燃やし競り合っているだけだ。確かに問題のある行動や発言ばかりだがそれでもあくまで競り合っている。それだけは間違いなかった。

「ですから。それで」

「いいのですか」

「そういうことです。それに」

「それに？」

「あの二人が競争すればいいことがありますよ」

校長先生が今度言うのはこうであった。

「それも実にいいことが」

「そうなのですか？」

「二人は好み焼きで競争していますね」

「ええ、まあ」

その通りである。どうして二人がここまでいがみ合うかというとやはりそれである。とにかく好み焼きで争っているのもまた全くぶれなかった。

「では互いにそれを競い合えば」

「それぞれのお好み焼きの味がよくなっていきますか」

「そういうことです。ですから」

「まあ過剰にならないればいいですか」

「多少過剰であつても暴力沙汰にさえならなければ」

お好み焼きが好物の校長先生は随分と規制を緩和している。この辺りは個人的な舌の好みもそれなり以上に関係しているのであつた。

「それで構いません」

「わかりました。それでは」

「見守りましょう」

今度は教育者としての顔と言葉だつた。完全に。

「温かく」

「はい、そうします」

「絶対に負けへんからな！」

「勝つのはうちじゃ！」

先生も校長先生も皆も見守る中で桜と菜月は相変わらず互いに腕をまくりいがみ合っていた。二人のお好み焼き対決はまだまだこれからなのであつた。

お好み焼き 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8418f/>

お好み焼き

2010年10月8日15時54分発行